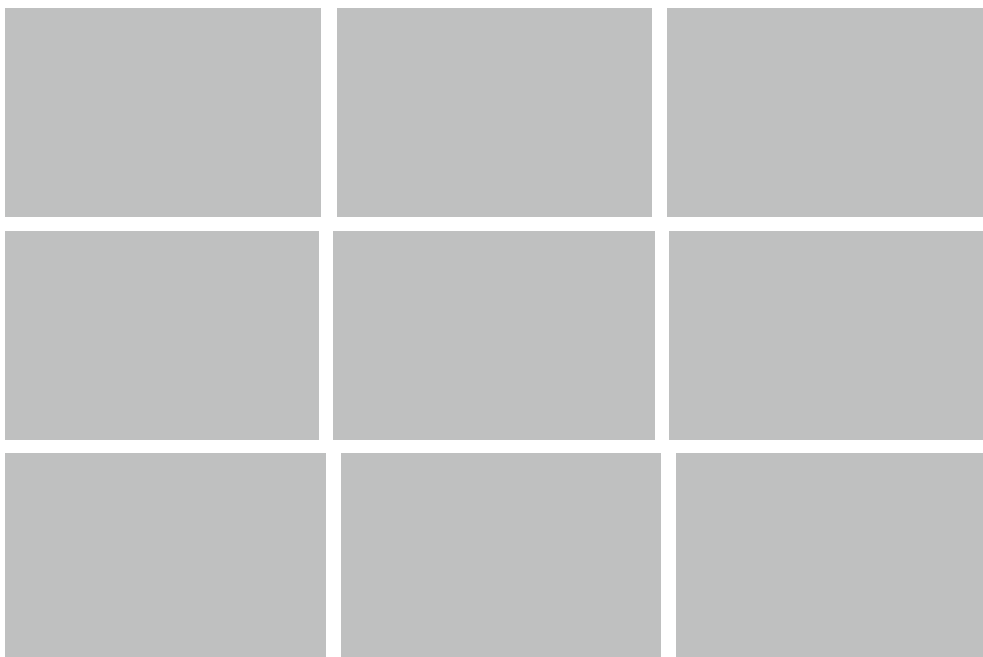


中平卓馬

《「サーキュレーション」

——日付、場所、行為」より》



中平卓馬 (1938-)  
《「サーキュレーション —— 日付、場所、行為」より》

1971年 (2012年プリント)  
ゼラチン・シルバー・プリント  
各32.0×48.0 (40.6×50.8)cm  
平成24年度購入および作者寄贈

こ

ここに九枚の写真を紹介しましたが、今回は作者からの寄贈も含め四十点を、このシリーズから収蔵しました。

作者の中平卓馬は、雑誌編集者として写真家・東松照明に仕事を依頼したことがきっかけで自らも写真を撮るようになり、やがて写真家として、また写真を中心に同時代への鋭い問いを突きつける文章の書き手として、一九六〇年代末から七〇年代半ばの日本写真界をリードしました。

その中平が、七一年の第七回パリ青年ビエンナーレに出品したのが、この作品です。正確には、会期中、毎日パリで撮影した写真をプリントし、日々展示に加え、増殖させることで、日付と場所に限定された写真を現実循環させるという行為をそれ自体が「作品」でした。

下段の左側の写真はビエンナーレ会場の中平の展示風景です。壁は毎日増殖する写真で埋まり、一部は床にも散らばっています。このプロジェクトに使うための暗室の確保などに手間どり、中平はビエンナーレが始まって数日たってから、ようやく展示を開始しますが、増殖した写真が与えられたスペースをはみ出したことなかですべての写真を自ら破り捨て、敢然と撤退するという伝説的な事態へと至り

ました。

中平が、この「行為」を通じて撮った写真には、印刷物やテレビ画面の複写など、数多くの既存のイメージが現れています。またパリで目にしたさまざまなモノやヒト（真ん中の写真のサングラスの男は中平自身です）、さらには展示風景までもがランダムに登場します。これらを等価に扱い、増殖させていくことで、政治的に利用されもすれば、消費経済とも深く結びつき、あるいは脳内の記憶までも侵食する、現代社会における写真の在り方を露わにしようという意図を読みとることができます。

さて、では行為自体が「作品」ならば、このたびコレクションに加わった一枚一枚の写真は何なのか？単なる「行為」の記録ではないのか？

写真がレンズの前の事物の客観的な記録として、私たちが安住する主観的で曖昧さをはらんだ世界の認識に、トゲのようにつきささり、批評的に作用する。中平は写真にそうした可能性を見出していました。だとすれば、これはビエンナーレでの中平の「行為」の記録にすぎないとしても、まさにそのことによってトゲとしてつきささり、写真について、あるいは美術や作品という概念について問いを発しているのではないか。中平の仕掛けた問いの射程は四十年後の現在にも届いているのです。

(美術課主任研究員 増田玲)